



C.M.D - case I -

qedqed

登場人物

うみっち

本名：海水 さより（うみみず さより）

性別：女性

趣味：推理小説を読む、リアル脱出ゲーム参加等のミステリー全般

出身：兵庫県（現在も両親、姉とともに実家暮らし）

在籍：北摂国立大学法学部法学科1回生

近況①：姉の影響で料理に興味を持ち始める。

近況②：同じ英語クラスの五五十（ごとう いつと）に告白されたが、速攻でお断りした。

近況③：やまっちと京都であったリアル脱出ゲームに参加し、見事クリア。

やまっち

本名：山土 ゆりね（やまつち ゆりね）

性別：女性

趣味：料理、カフェ巡り

出身：滋賀県（現在はひとり暮らし）

在籍：北摂国立大学理学部数学科1回生

近況①：ひとり暮らしをするようになり、ますます料理が得意に。

近況②：食堂で近くに座った五十が「俺の作った暗号は誰にも解けない」と豪語していたため、うみっちならすぐに解けると思うけどなあ、と思わず呟いてしまった。

近況③：ダイエット中で甘いものを絶っているが、うみっちからはそんな必要ないと言われた。

そらっち

本名：宙空 れいら（そらく れいら）

性別：女性

趣味：ダーツ、ドライブ

出身：大阪府（現在はひとり暮らし）

在籍：北摂国立大学医学部医学科1回生

近況①：大学入学を機にひとり暮らしを始めた。

近況②：自動車免許証を取得した。

近況③：中学時代から男女問わず人気があり、大学入学後はますますモテるように。

「やまっち、ほんとにどうしたんだろ？」

私は19:15を指そうとしている腕時計を見ながら、多少の怒りを込めて言った。
約束の時間は19:00。そらっちもそらっちのお父さんも待ち合わせ場所に到着している。
やまっちのひとり暮らしの学生マンションはここから徒歩で10分ほどのところにある。
友達同士の待ち合わせなら15分ぐらい問題ないが、今回は別だ。
私が無理を言ってお願ひしたことなので、とても焦っていた。

私は海水さより。友達からはうみっちと呼ばれている。
私とやまっち、そらっちの3人は大学の入学式で起こったある事件で知り合い、仲良くなった。
今日は大阪府警の本部長であるそらっちのお父さんと夕食を共にする予定をしていた。
ミステリー好きの私が是非会わせてほしいと、そらっちに熱心にお願ひしたのがきっかけだった。
。後から聞いた話では、そらっちのお父さんが娘が心許している友達に会いたいと思ったことがこの夕食が実現した大きな要因だったらしい。

それなのに、やまっちが来ない！
そらっちのお父さんは、気長に待ちましよう、と笑って言ってくれているが、私は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
やまっちは、時間にルーズではない。むしろ厳しい方だ。
大学に入学してから知り合ったので、長い間一緒にいたわけではないが、相手の気持ちをしっかり考えられる人だということは間違いない。
仮に何らかの理由で遅れることになったとしても、必ず連絡を入れるはずである。
しかし、やまっちからの連絡はおろか、こちらから連絡しても一向に返信がない。
待ち合わせ時間から15分が過ぎ、うみっちは何度目かのメールをやまっちに送った。

from : うみっち

件名 : なし

添付 : なし

やまっち、どうしたの？

待ち合わせの時間とっくに
過ぎてるよ！そらっちもそ
らっちのお父さんも来て
るよ！！

とにかく連絡ちょうだい！

time : 2017/01/29 19:17

すぐにやまっちから返信があった。

from : やまっち

件名 : 351449.158711.616110.13122

添付 : なし

海水さん、ごめん！約束の2時間ぐらい前に、父から母が倒れたって…。それで今日の約束ドタキャンしちゃったんだよ。ほんとうにごめんなさい…。メールなり、Lineなりを送ることも突然のことで思いつかなくて。母は何ともなくて、父が大げさなだけだったよ。で、今さっき帰ってきた。やっぱりこういう時に実家へすぐの距離は大切だけどくたくただよ。今日という日を楽しみにしてたのに、とつても。

time : 2017/01/29 19:20

私はそのメールを見て、“あること”に気づき青ざめた。

側にいたそらっちとそらっちのお父さんもただならぬ気配を感じ取り、私を見つめる。私は動揺しながらもどう行動すべきかを必死に考えていたとき、スマホに着信があった。やまっちからだ！

「もしもし・・・うみっち？メール見てくれた？」

私はとりあえず“あること”に気付かないふりをした。この電話の真意を読み解こうとしたのだ。

「うん、見たよ！大変だったみたいね。お母さんは大丈夫だったの？」

「うん。大したことなかったよ。今日はごめんね。」

「ううん、気にしないで。大したことなくて何よりだよ。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・どうしたの？」

「あー安心したらお腹すいちゃった。ケーキ買ってから今から来てくれない？」

「ケーキ？今から？」

「うん。コードっていうお店の。アルファベットで”C”、”O”、”D”、”E”ね。そこのチョコレートクリームパイが好きなんだあ。とってもおいしいの。パティシエに聞いたんだけど、隠し味に醤油が入ってるんだって。でもね、おいしいんだけど、空気抜きをもっとしないとね。それに私にはそれに入っているチーズとココアがあんなには要らないんだよね。あっ、要予約の店だから必ず電話を入れてね。」

「・・・・・・・・」

私はメモ帳をカバンから取り出し、何かを書き始めた。

そして、そらっちのお父さんと呼び、メモの内容を見せた。

そらっちのお父さんは驚きながらも、私を信用して、すぐに行動に移してくれた。

「・・・・・・・・」

「ごめん。ちょっと聞き取りづらくて、もう一度ゆっくり言ってくれる？」

私は少しでも時間稼ぎがしたかった。

「うん・・・・・・・・電話を入れてね。」

その時、そらっちのお父さんが”完了した”と合図を送ってくれた。

「わかった！パンダ型のクッキーも買ってすぐに行くよ！！」

「ありがとう！すぐにね！！」

電話を切り、私はそらっちのお父さんにこう言った。

「すぐにやまっちの部屋に警官を突入させてください！」

私とそらっちは警察に保護されたやまっちと病院でようやく会うことができた。

念のため病院で検査することになったので、私たちも駆けつけたのだ。

疲労困憊のようだったが、怪我がなくホッとした。

「やまっち、ほんと無事で良かった！まさか五十がやまっちを監禁するなんて...。」

やまっちは私たちの顔を見て、ようやく安堵の表情を浮かべて、事件の始まりを話し始めた。

「本当に怖かったよ...。そろそろマンションを出ようかなって思ってるところに急にやってきてナイフで脅されて。で、あの内容のメールを送れって言われて。それにしてもよく気付いたね。」

」

「内容がおかしかったしね。特に私のことを”海水さん”って書いてたところが引っ掛かって。あのメールは暗号になってた。件名の数字は行数を表し、文頭の文字をその順番通りに抜き出すと、『はやくきて ひとりで ごとうが へやに』となる。」

「うん。五十は私がうみっちだったら、すぐに暗号が解けるって言ったのが気に入らなかったみたい。プライドを傷つけられたって。」

私はそれを聞いて、五十の幼さと狂気にゾクッとした。それは標的がやまっちだけではないことを薄々感じていたが、先ほど警察の事情聴取の時にそらっちのお父さんから五十の計画を聞き確信したからだ。

「でも、私が本当の標的だったみたいね。付き合うのを断ったことによる恨み。もし、暗号が解けなければ私のせいで友達が死ぬ。暗号が解けても、ひとりでやまっちの部屋に行ったら、私も殺す計画だったらしいの。」

やまっちはそれを聞き、恐ろしさが蘇ってきたようで、表情をゆがめた。

「暗号はすぐに解けたけど、ひとりで駆けつけた方がいいか、それとも警察を呼んだ方がいいか迷った。その時、あの電話があったの。」

「うん。五十がなぜ電話を掛けさせたのか分からなかったけど、今のうみっちの話を聞いて合点がいったよ。計画にはうみっちが暗号を解くかどうかというのがとても大事だったんだね。それをどうしても知りたかったみたい。」

ここで、私はどうしても知りたかったことをやまっちに聞いてみた。

「どうして五十はやまっちが全く別の話題出した時に電話を切らせることをしなかったの？」

「あー、実はうみっちが暗号を解けていない様子だったんで狂喜してて。半分上の空だったのよ。」

私は大きくため息をついて、

「おめでたいやつ。まあ、みんな無事だったから言えることだけど。」

「とにかくチャンスだと思ったの！うみっちもこちらの様子を伺っているようだったから、何か行動を起こさなくちゃって。で、うみっちにいずれ出そうと思ってた暗号をとっさにね。でも、

よく解いてくれたよ！！」

「ダイエット中のやまっちからケーキのリクエストがあったからね。そして、コードという店名。コードは暗号って意味があるから。でも、ちょっと難しかったよ...。」

やまっちは、ペロツと舌を出し、

「アルファベットってヒントは出したよ。」

と笑いながら言った。

「うん、まあね。チョコレートクリームパイを全て英語にする。

CHOCOLATE (チョコレート)

CREAM (クリーム)

PIE (パイ)

で、隠し味の醤油は料理の調味料を示す〈さ・し・す・せ・そ〉の

SE (せ)

と考える。そこから、

AIR (空気)

は抜く、

COCOA (ココア)

CHEESE (チーズ)

は要らないと言っていたから、それらのアルファベットを省く。

そして、”電話を入れて”をヒントに、残ったアルファベットを並び替えると、

『TEL PM』

PMは隠語でポリスマンのこと。つまり、『警官に電話して』となる。」

「うん。本当によく解いてくれたよ。でも、電話を切ってすぐに警官が踏み込んできた時はびっくりしたよ。」

私は横にいたそらっちに視線をやり、

「それはそらっちのお父さんのおかげ。電話の最中に筆談でそらっちのお父さんに電話掛けてもらったの。大阪府警の本部長だから事情を話せば、きっとすぐに動いてもらえると思って。だから、何とかしてやまっちからの電話を延ばそうとしたわけ。でも、警官を呼んだことにより五十が逆上してはいけないから、『やまっちの部屋の前で警官を待機しておいてほしい』とだけ伝えてほしいってお願いしたの。そして、やまっちからの暗号によって警官が踏み込んで良いことが分かったってわけ。」

「なるほど、そういうことだったんだね。パンダ型のクッキーも持ってくるって言ってくれたから、暗号を解けたことを確信できてたし安心したよ。パンダは隠語でパトカーのことだものね！」

私もやまっちも、そしてそらっちも実際の事件に遭遇するなんて一生に一度あれば十分！と締めくくった。

しかし、この数日後に今度はそらっちに危険が及ぶことを私たちはまだ知らない。